

ミクロネシア連邦ポンペイ州における戦争遺跡の現況と 教育・観光面における活用策の検討

高野誠二・栗原 剛・永山茂樹・奥山三喜・千葉雅史

1. はじめに

日本では近年、近代化遺産に関する関心が高まってきている。2014年に群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」、2015年に「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」がユネスコ世界遺産に登録され、社会の耳目を集めるようになったことも大きな契機となった。

近代化遺産の定義はさまざまなものが存在する¹⁾のだが、広義にとらえる意見の中には戦争遺産を含むとする考えがある。近代国家として主権を確立して統治をおこなっていく上では、軍事や戦争行為は多かれ少なかれ、良かれ悪しかれ役割を果たしてきたからである。1995年に文化庁が「近代遺産調査実施要項」を定め、それに基づいて全国での近代化遺産の確認調査が行われると、その中では多数の戦争に関連した遺産がとりあげられた。戦争遺産のうち、特定の場所に結び付いた構造物・遺構・跡地が戦争遺跡と表現される。「戦争遺跡保存全国ネットワーク」をはじめとする関係者や研究者に広く受け入れられている戦争遺跡の分類では、政治・行政関係、軍事・防衛関係、生産関係、戦闘地・戦場関係、居住地関係、埋葬関係、交通関係、その他の8種類の区分が含まれ、戦争に関連したものを広く含んでいる（十菱・菊地編（2002）、十菱・菊地編（2003））。

ところで、戦前の日本が獲得した領土や、日本軍が占領統治したり戦場になった海外にも、多くの戦争遺跡が存在している。現在は日本の統治下でないこれらの諸地域を広くカバーする形で、網羅的に日本軍関連の戦争遺跡の調査が行われたことは今までない。先の大戦で敵対関係になった諸国と国交を回復し、海外旅行の自由化といった渡航環境の改善が図られ、更にはインターネットの普及によって海外の情報が入手しやすくなった今日でも、海外の日本軍に関連した戦争遺跡の情報は断片的なものしか入手できない。日本において戦争遺跡の研究やそれを活用した平和教育に携わる人々の関心も、海外の戦争遺産には十分に向いていないといえる²⁾。

本研究において目指すことは、かつて日本が統治していたミクロネシア連邦（Federated States of Micronesia, 略してFSM）のポンペイ州（Pohnpei, 1984年まではポナペ Ponape と呼称されていた）とその周辺において、①主要な戦争遺跡について既に一般的に入手できる情報を検証するとともに現況の情報を補充する ②海外における戦争遺跡を教育や観光に活用す

る場合についての検討を行い、そこでの注意点や効果とともに今後に向けての改善点を整理する、ことである。①については海外での日本の戦争遺跡の情報を充実させること自体に意義があると考えられる。②については、戦争遺跡の保存や活用に関心が向かうようになってまだそう長くはない現在、各地の戦争遺跡の現状や来歴の報告が多く世に出されるようになった一方で、戦争遺跡を教育に活用した場合の効果や問題点の検証といった視点からの研究³⁾は少ないのが現状である。本研究はその点について、新たな知見をもたらすものであると考えられる。

本研究の実施にあたっては、学校法人東海大学が2018年に実施した第49回海外研修航海(2018年2月15日～3月28日)においてその実行委員、同研修団役員として著者が参加し、同研修航海におけるポンペイ島での研修期間である2月22日～24日に現地調査を行った。同研修団のうち戦争遺跡の見学に参加した学生に対しては、その直後にアンケート調査を行った。

2. ポンペイ州における主要な戦争遺跡の現況と評価

ミクロネシア連邦は日本の南、西太平洋の赤道以北に位置する島嶼国家である。米西戦争での敗北を機にスペインがこの地域から撤退し、1899年にドイツによる統治へと変わった。1914年に第一次世界大戦が起これると日本はドイツと敵対したことから、これらのドイツ領ミクロネシアは日本軍によって占領され、戦後の1920年には国際連盟によって日本の委任統治領と認められた。日本はその統治機関として南洋庁をパラオ諸島のコロール島に置き、支庁の一つがポンペイ島の中心都市であるコロニア(Kolonia)に置かれた。

太平洋戦争末期の1944年2月ころからアメリカ軍の攻撃が激しくなり、日本海軍の基地が置かれたチューク諸島や、ポンペイ島のコロニアの街と飛行艇基地が置かれたポンペイ島沖のレンゲル(Lenger)島などは5月までに激しい空襲や艦砲射撃を受けた。しかしポンペイ島は最後までアメリカ軍の上陸侵攻を受けることなく、終戦を迎えた。1945年9月でのポンペイ島における現地人は約5,864人に対し、陸軍第52独立混成旅団の5,905人、海軍第42警備隊の2,005人、民間日本人約5,679人の計約13,500人の日本人がいた⁴⁾。戦後は国際連合によってアメリカの信託統治領とされ、その後1990年にミクロネシア連邦は独立を果たした。

ポンペイ州における戦争遺跡を紹介した資料は多くは無い。日本語で入手しやすいものとして、JICA シニアボランティアの観光担当として2013～2015年にポンペイ島で活動した仲誠一が個人的に作成した資料「日本人の足跡を訪ねて FSM ポンペイ州コロニアタウン 散策ツアー 2015年度版」がインターネット上でPDFファイルとして公開されている。

コロニアの街以外の州内の戦争遺跡としては、観光ツアーの目的地ともなっている戦跡がいくつか存在しており、それらの概略程度は各種の観光情報の中でも触れることができる。また、FSM 資源開発省観光局が作成した日本語のA5版4ページの2種のパンフレットにおいてそれぞれ、ソケース・マウンテンとレンゲル島について詳細地図と解説入りで紹介されており、現物はコロニア市街地内のPohnpei Tourism OfficeとJICA事務所において配布されていた。

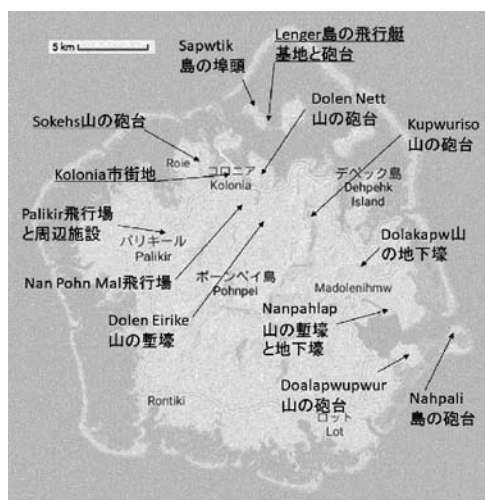


図1 ポンペイ州における戦争遺跡⁶⁾

英語で入手できる情報としては、オーストラリア政府の支援で開設された「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイト⁵⁾内の「World War II Sites」のセクションが、コロニア市街地を除いた全島の戦争遺跡を現地調査の上で他の観光資源と共に網羅的に紹介しており、管見の資料としては一番詳しい情報源である。位置情報のGPSデータファイルも公開している。上記のFSM資源開発省観光局が作成した日本語パンフレット上の地図や情報の大半は、明示してはいないものの、本ウェブサイトから主要部分を転用、翻訳したもののようである。

以下本章では、まずポンペイ州における主要な戦争遺跡を挙げ、上記資料などに情報を依拠しつつその概要を記すとともに、現地において状況確認できたものについてはその様子も明らかにし、上記資料の補足説明などを行う。

2.1 コロニア市街地内の遺産

・アルフォンス (Alphonse) 砦, 現在の通称 スパニッシュ・ウォール (Spanish Wall)

コロニアの中心部に位置しており、この街における主要な史跡かつランドマークと認識されている。スペイン統治時代の1887年に発生した現地住民による蜂起を受けて建設された砦のうち、石灰岩などを積み上げて漆喰で目地を埋めた城壁の数百m程と門の部分などが断続的に残されている。後年に崩された部分も多く、現在も残っているのは当時の城壁の一部分でしかない。仲 (2015, p8) では「ドイツ時代には、一度は解体され、現地人の通行も可能になりましたが、1910年のソケースの乱後、再構築されました。」との記述があるのだが、その詳細については現地で視認しようとしたものの不明であった。

また、日本統治時代には城内の空間はグランドパークと呼ばれ、現地人の小学生の教育を日本人教師が担うコロニア公学校のグランドとして使用されていた。西側城壁の内側部分には「お宮」と呼ばれる造り出しの舞台状の構造とそれに続く正面階段とスロープがあり、この部分は日本統治時代の後補の可能性が高い。この「お宮」において君が代斉唱、毎朝の皇居遥拝と「天皇陛下万歳」三唱が行われていたそうである。

・ジャーマン・ベルタワー (German Bell Tower)

コロニアの中心部に位置しており、スパニッシュ・ウォールの北端から街路を挟んで北に接している。こちらも市街地内における主要な史跡かつランドマークである。ドイツ統治時代の1908年に建設開始、1913年に完成のカトリック教会の聖堂である。太平洋戦争中には日本軍に

より兵舎として接収されていた時期もある。1944年のアメリカ軍の空襲と艦砲射撃により破壊された。礼拝堂の部分は放棄され、鐘楼は鉄材を用いて床の骨組み、壁面内部の支柱や斜交い、階段などを後補して使用が続けたと思われる。鉄材の腐食が進んだまま放置された現在では階段を上るのも難しく、仲（2015, p13）の「鐘楼の鐘は今も使用されています」との記述は、鐘は別の場所に移設されて使用されている、ということの意味しているのではないかと推測される。



図2 スパニッシュ・ウォールの「お宮」部分



図3 ジャーマン・ベルタワー →

・ポナペ島物故者慰霊碑

スパニッシュ・ウォールの西側に、グランドと屋根付き広場を挟んで立っている。日本の委任統治領時代と太平洋戦争の物故者の冥福を祈るのと平和祈念のために1979年5月に建立された旨の日本語の記銘がある。仏像の背後には光背ではなくて十字架が立っている様子はいささか奇妙な印象を受けるが、ミクロネシアにおける慰霊碑として多く見られる様式とのことである（印東, 2015, pp.70）。移住してきた日本人は仏教徒、先住の現地人はキリスト教徒という背景を象徴しているともいえる光景である。正面からみて碑の土台左側には、スプレー塗料によると思われる大きな落書きがあったのが残念である。



図4 ポナペ島物故者慰霊碑



図5 ポナペ棧橋付近の現在の様子

・ポナペ棧橋（支庁棧橋）

終戦後の引き揚げは、この棧橋と海軍ドックに来る上陸用舟艇が沖合のレンゲル島までを往復し、そこで外洋船に乗り換えて本土の横須賀市浦賀港を目指した。現在は棧橋周辺の様子は大きく変わり、水辺周辺は私有地で柵に囲われて簡単には近づけない。仲（2015, p15）に示されている場所には岸壁が見えるものの棧橋状の構造物とは見えない。1944年2月アメリカ軍撮影の航空写真と比較すると、これはもともとの船溜まり部分の埋め立てが進んだ結果と思われる。当時の様子を思い描くためにはもう少し詳しい情報が必要である。

・ポナペ国民学校

日本人の子供が通った国民学校は、1944年3月6日以前の空襲によって建物は破壊されたということだが、正門の門柱と階段が良い状態で残っている。かつては門柱に「南洋廳ポナペ国民学校跡」との木製看板がかかり、その看板は悪戯をされるので現在は外して保管してあるとのことであるが、その場所や管理者などの情報は不明である。ポナペ島物故者慰霊碑の落書きの件とも併せて考えると、文化財としての保護への取り組みや、モラルの向上が望まれる。



図6 ポナペ国民学校の正門



図7 ポナペ国民学校の奉安殿

・ポナペ国民学校の奉安殿

コロニア市街地の中で、ポンペイ島における日本統治時代の社会の様子を最も良く彷彿とさせ、かつ保存状態も比較的良好なのが、ポナペ国民学校内に作られた奉安殿である。

奉安殿とは、天皇皇后の御真影（肖像写真）と教育勅語をその中に納めていた小建築のことであり、終戦時までには学校などに付属する施設として一般的なものであった。慶事の祝典では生徒職員が奉安殿内の御真影に対して最敬礼するなど、現人神である天皇をその頂点に抱く当時の日本社会を具現化したものである。そして、当時の国民に対して皇民意識を植え付ける上での、重要な社会装置でもあった。神聖視されていた御真影を、万一の失火などによって失ってしまうことが天皇への不敬と見なされることへの危惧から、多くの場合はコンクリートなどで躯体を構築して鉄製扉を取り付けるなど、耐火仕様の構造となっている。また外観としては神社の社殿を模していることが多いが、重厚な古代神殿風のものなどもある。

ポナペ国民学校付属の奉安殿は、全般的に保存状態が良好である。主要な部材は欠けることなく原型を留め、四隅の丸柱や壁面の一部には朱塗りの塗料も鮮やかに残っている。外観が神社本殿建築を模しているので一見してこの奉安殿の使用目的や方法が想像しやすく、当時の社会の理解に有用な遺産である。屋根もコンクリート製と思われるものの、長年屋根に降り積もった植物の枝葉などが土壌と化して一部に雑草が茂っている点が年月の経過を実感させる。外形的には鹿児島県奄美大島の瀬戸内町節子の節子小中学校跡に残されている奉安殿と似た設計と見受けられる。ただし、このポナペ国民学校の奉安殿は、街路から奥まった民家の庭の先の茂みの中にポツンと残されているので発見するのが少々難しいし、接近するのがためられる。

このポナペ国民学校の奉安殿の遺産としての価値を高めているのは、その比較的良好な保存状態と共に、現在まで残されている他の類例が少ない点にある。奉安殿は軍国主義教育が徹底されていた当時は日本の統治が及ぶ地域の学校などに多数が作られたものの、敗戦後のGHQによる神道指令と教育改革の中でそのほとんどが破却された。日本本土で現在まで残された奉安殿に限られる一方で、戦後に日本統治から切り離された地域、例えば鹿児島県奄美諸島や沖縄県などでは現在まで残された奉安殿が散見される。当時の日本の海外領土であったこのポンペイ島でも、同じ理由により現在まで破却を免れて残されているのである。

・燃料庫・弾薬庫・防空壕

コロニア市街地の中央部の台地上にCOM (College of Micronesia) ポンペイキャンパスがあり、その敷地外縁の崖線を掘り込んだ軍の貯蔵庫や防空壕の存在が確認できる。仲 (2015, p22) によれば、これらはドイツ軍が構築し日本軍も引き続き使用していた。著者が確認したものは全てキャンパスの北東側の崖線に存在し、仲 (2015, p22) に書かれている「北西」側では発見することはできなかった。

防空壕は街路のすぐ脇に開口しているが、下草に覆われていて発見は難しい。概ね数mおきの等間隔で著者の見る限り3つ存在していた。奥行きは深くなさそうで内部で横方向に互いに連結している可能性も考えられるが、崩落も見られたことから内部の確認は行っていない。

また、仲 (2015, p22) では煉瓦とコンクリートを用い、崖を掘り込んでファサードの入口に鉄製の頑丈な扉を設置した保管庫がその写真とともに紹介されている。しかしその文中を読む限りでは、燃料壕と弾薬壕が、同一の壕を利用していたものなのか、それとも別々の壕として存在しているものなのか、仮に別々に存在しているとしても写真に掲げられている壕がどちらのものなのか判別できない。著者が現地で探索したところ、街路に接した崖の中ほどに倉庫らしき構造物が見つかった。扉には鍵がかかっており、中を覗ける穴も小さくてその暗い内部の様子はほとんど不明であり、それが仲 (2015, p22) に掲げられた写真の壕であるか断定できなかった。軍用の壕や防空壕がその後周辺住民によって倉庫などに転用される事例は多々あり、これが軍の設置した壕の転用された姿である可能性は少なからずあると考える。

・九十五式軽戦車（ハ）号群



図8 Pohnpei Tourism Office 隣の九十五式軽戦車

九十五式軽戦車は皇紀2595年（西暦1935年）に制式化されて大量生産され、日中戦争から太平洋戦争にかけて各地の戦場で活躍した。

まず街の中心部、Pohnpei Tourism Officeの隣に無限軌道（いわゆるキャタピラー）までよく残る、保存状態の良い一台が置かれている。一部のハッチなどが欠落していたが、全体としてよく原型をとどめており、車体には迷彩塗装の一部や番号「9」のペイントも見てとれる。

また、かつての海軍警備隊の本部があった付近の海岸近くには、十台もの九十五式軽戦車が一行列に並んで置かれており、壮観である。状態は一台ごとにさまざまであり、車体の錆や腐食が激しいのは長年雨ざらしだった年月を考えれば当然であり、パーツの欠落も多くみられるが、全体的には比較的良い状態で残されている。ざっと見たところ、目立つような被弾箇所や破壊された部分も無いようであり、ポンペイ島では地上戦が行われなかった歴史を物語っている。日本の国内において第二次世界大戦当時の戦車が保存されている例は多くないし、戦場から回収されたものには多数の弾痕や破壊された跡があったりもする。このコロニアでの例のように10両もの戦車がずらり並ぶのは珍しい光景である。ただし、この場所は道路から資材置き場を通り抜けた先のだいぶ奥まったところにあり、この戦車の一団の手前にはゲートも設置されている。著者が訪問した時にはたまたま土地の所有者と思しき方がいたので、ゲートを開けていただいて中に入ることができた。現地で見学するにあたっての難易度が少々高い。



図9 海軍警備隊本部跡の九十五式軽戦車



図10 海軍警備隊基地の栈橋

・海軍駐屯地と栈橋

前項で触れた九十五式軽戦車群が置かれているあたりが、コロニアに駐屯していた海軍の警備隊の本部の跡である。仲（2015, p18）にもあるように、戦後はアメリカ軍が駐屯していたが、現在では整地されて資材置き場や民家、空地などになり、敷地には当時の痕跡はざっと見

る限り見あたらないようである。沖に向かって延びる軍用栈橋は今も形を留め、運搬用の軌道の線路が一部に見えるものの、大部分は下草に覆われている。これらの場所は前項でも触れた通り、私有地のフェンスのゲートを越えた先にあるので、現地の訪問には注意を要する。

仲（2015）ではコロニア市街地における他の戦争遺跡として、p19には海軍駐屯地にも電力供給していたダムと水力発電所の跡、p32には市街地再北端のソケース集団墓地の突き当りの海岸際にあるトーチカが紹介されている。著者は時間の関係で、今回の調査ではこれらの現地確認はできなかった。戦争遺跡以外の日本統治時代の名残の遺産として、各種の記念碑や銅像、教会、店舗や倉庫、橋、南洋庁市庁舎や産業研究所なども紹介され、3時間の徒歩ツアーでこれら全ての見学が可能であると記している。コロニアの歴史を訪ね歩くには仲（2015）は非常に有用な情報である。

2.2 コロニア市街地外の遺産

・ソケース・マウンテンの砲台群

海路でコロニアの港を目指すと、その入り口西側の大きな岩山が標高202mのソケース（Sokehs）ロックである。岩山の南側への尾根続きの山がソケース・マウンテンであり、山上一帯はポーン・トルラップ（Pohn Dolap）と呼ばれ日本軍の砲台群が構築されていた。コロニアの中心部から西に向かい、現在は埋め立てでボンベイ島と陸続きになったソケース島に入って山の麓まで自動車でも15分程である。車道幅の山道が標高250m程の尾根上まで1.3km程で通じているが、急勾配かつ路面がかなり荒れている。ここは「The Sokehs Ridge WWII Memorial Park」とされ、いくつかの要所にはだいぶ汚損が目立つものの史跡解説板が設置されている。

著者は現地観光業者のガイドの案内で、実習として同道する学生13名と共に現地を訪問した。このソケース・マウンテンの戦争遺跡については、本章の最初でも触れたように、「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイト転用する形でFSM資源開発省観光局が発行した日本語のパンフレットが存在する。このパンフレットには遺構の中核的な要素である英国アームストロング・ホイットワース社製の150mmカノン砲⁷⁾と、2基の127mm2連装高角砲を中心とする主要部分の概略図や解説が掲載されているが、概ね正確な印象であった。

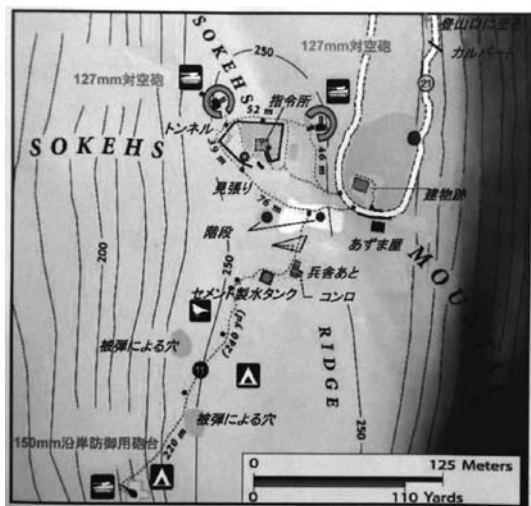


図11 FSM資源開発省観光局発行のポーン・トルラップの案内パンフレット記載の概略図

150mm カノン砲（カノン砲とは砲弾を水平に近い方向に直射する砲のこと）は、沖合のリーフの切れ目である水路を通して島に海路接近してくる敵艦船を攻撃する沿岸警備の目的で設置していた。トーチカ内にその横長の開口部から砲身を出した状態なので砲身の可動範囲の仰角



図12 ソケース・マウンテンの150mm カノン砲

角はあまりない。実戦使用はなかったとのことである。土被りのある壕内に入ると天井には太い鉄骨の梁が渡っており、壁面のコンクリートには材料が不均等に混ぜ合わされたまま固まってしまったジャンカは見当たらず、大きな石などを混ぜてカサを増やしていることもない。全体的に良質な資材を用いて丁寧に構築した印象であり、敗色が濃厚になる中で足りない資材で急造したものとは異なっている。

2基の四十口径八十九式127mm 2連装高角砲（高角砲とは対航空機迎撃用に仰角を大きくとり速射を可能にした砲のこと）の状態も比較的良好であった。雨ざらしなので錆や腐食は当然であり、失われてしまったり外れて周囲に散乱しているパーツも多々ある。下草に覆われている部分は多いものの、砲の周囲を環状に取り巻く防護土塁もよく原型をとどめ、その側面の砲側弾薬庫（砲のすぐそばにて砲弾を配置し、射撃時に迅速に供給を可能とする砲弾置場）も



図13 ソケース・マウンテンの八十九式127mm 高角砲（西側に設置のもの）

良く分かる状態である。全体として良く保たれているので、対空砲座とはどのようなものか当時の様子を視覚的にイメージすることができる。この高角砲もそうであったのだが、砲座は地表下に構造物を持ちうるので、ハッチが失われたまま下草に隠れて穴が開口していたり、あるいは水が溜まりその水面を落ち葉が覆っていると見た目には全く分からないので、見学中に落ちてしまわないように細心の注意を要する。

この他、パンフレットの概略図に掲載されているものとして、兵舎跡のコンクリート基礎部分、コンクリート製水槽、爆撃によってできた窪地、見張り塔の基礎部分の石垣、指令所壕などは比較的容易に確認できた。逆に、現地を確認できたもののパンフレットの概略図に記載されていないものとしては、80mm 高角砲（現地に掲げられた案内説明板では、6門がコロニア防衛用に設置されたたとある。その一部がソケース・マウンテンにも設置されたのではないかと推測される）の砲座跡かとも思われる円形のコンクリート構造物が地表に認められた。

パンフレットの概略図の範囲から外れ、砲台群から尾根上の平坦地の北端部分のピークには通信用の鉄塔と小さい建物がある。これらは戦後の構造物と思われるが、その基礎部分や周囲



図14 ソケース・マウンテン頂上より臨むソケース・ロックの頂部、空港のあるタカチク島、レンゲル島（矢印）

の石垣は日本軍が探照灯（サーチライト）を設置した当時のものと思われる。この場所には日本語で「無名戦士の碑」と刻まれた小慰霊碑がある。建物の屋上からは周囲の展望がきき、真北のソケース・ロックから空港、東南側のコロニアの市街地までへと眼下に眺めることができる。周囲には塹壕が断続的にみられ、地下壕へと降りる階段は少し降りた先で埋没している。先に触れた指令所でもそうであったが、この階段部分の屋根の梁には周辺で使用されたと思われる軌道のレールが再利用されている。

パンフレットにはその他に、頂上展望台の手前に電気の供給元であったヤンマー発電機が残っているとの記述が写真と共に記載されているが、車道からは少し東側に外れた藪の中にあるようでは確認できなかった。現地解説板には標高230mの尾根南端付近にはライフルの銃座があるとのことだったが、その場所への小道は藪に埋もれていた。山麓から尾根へ上る山道を登り始めて数分程度の場所から分かれて山側へ上っていく山道が接続しているが、山上へ続く軍道として日本軍が開設した道路はその分岐する山道であり、少し行くと太陽発電パネルが設置されているが、その更に先は藪に埋もれているとのガイドの話であった。

砲台の付近に必ずあると思われる弾薬庫は、パンフレットや現地解説板に情報がなく、簡単に歩き回った範囲では発見できなかった。通常の配置ならば、砲台から少し距離をとった場所で、海側（敵の想定侵入路）に背を向けた側を開口部とした壕となっていると思われる。

ソケース・マウンテンの山上の戦争遺跡については、FSM 資源開発省観光局が作成した日本語パンフレットと、その情報の出典である「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイトには、他にもさまざまな小遺構が紹介されている。しかし、北端のピークに至る車道幅の道路を除けば、遊歩道としての整備もなく厚い下草に覆われた小道で、雨後になればかなりの泥沼と化す状態であった。ガイドの案内が無ければ、これらの探索は大きな困難が予想される場所である。

・レンゲル島

レンゲル（Lenger）島はコロニア沖の3 km 程に位置する小離島で、北東岸に飛行艇基地と標高70m程の中央山上に砲台群がおかれていた。前項で言及した FSM 資源開発省観光局が発行した日本語パンフレットと同じシリーズで、レンゲル島の戦争遺跡を取り上げたものが存在する。こちらでも現地観光業者のガイドの案内で、学生13名と共に訪問した。

ポンペイ島を取り巻くリーフは天然の消波ブロックの役割を果たしており、その内側は外洋に比べて波が穏やかである。レンゲル島はリーフの内側にあるので、穏やかな水面を利用して

発着する飛行艇の基地には好都合の場所である。1944年になってからの爆撃で大規模に破壊されたが、終戦後に修復されて1970年までポンペイの空港として使用されていた。

北東岸には1939年頃に構築された、端部が海に向かってスロープになり、スベリと俗称される飛行艇の陸揚げ用の栈橋状傾斜路が数十mの幅で伸びており、比較的大粒な礫を混ぜたコンクリートで構築されている。その上面には軌道などは敷設されておらず、小構造物やブロック片によって囲われた部分などがあるが、貝の孵化施設として1990年代に使用していたという5つの水槽をはじめ、その多くが終戦後に作られたものである。栈橋部の西側には水面下へと続く階段が2か所設置されており、西側の一部分は波浪によって欠損部分が生じている。

レンゲル島では戦争遺跡巡り、シュノーケリングやシーカヤックなどのレジャーツアーの目的地となっているが、ツアーのボートはこの栈橋を発着場として利用している。

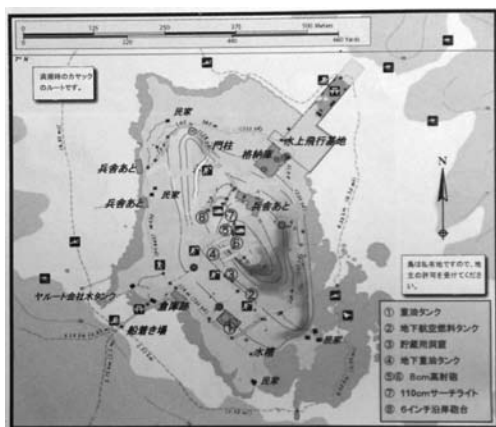


図15 FSM 資源開発省観光局発行のレンゲル島の案内パンフレット記載の概略図



図16 レンゲル島の飛行艇基地の栈橋状傾斜路

栈橋状傾斜路から内陸へ進むと、戦後の空港として利用していた時代の出入国管理事務所の

建物が小道の西側に、さらに少し先の東側には税関の建物が廃墟となって残っているのだが、どちらも建築ブロック作りで小屋という表現が適する程度の小さな規模である。



図17 レンゲル島東部の弾痕のあるコンクリート製水槽

その先には巨大な格納庫の跡があり、パンフレットにはコンクリート製の基礎と、張り巡らされた赤錆びた鉄骨の骨組みや零式観測機の機体の一部が存在していると記してある。現地では大きな規模の土台が視認できたものの、深い藪の先は見通しが利かなかった。島を外周する小道があり、時計回りに進む

と多数の爆撃痕の窪地，機銃掃射の弾痕が多数残る迷彩色の痕跡のあるコンクリート製水槽，巨大な鉄製原油タンク，倉庫のコンクリート製基礎部分，兵舎跡などを確認することができたが，これらの遺産の全てがパンフレットの概略図に記載されているわけではない。また島の南西部の小道の脇には，「大正五年」「経緯度測点」「水路部」と読み取れる刻印のある測量基準標が残されており，日本軍の存在を確か感じさせてくれる遺物であるが，当時の調査者が日本語を理解できなかったために気づけなかったためか「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイトでは言及がない。



図18 レンゲル島南部の巨大原油タンク



図19 レンゲル島南西部の測量基準標

・レンゲル島山上の砲台など

前項で触れた測量基準標付近から分かれて山上へと小道を進むのだが，案内表示などは何もないので，ガイドに教わることなく見つけることは難しいであろう。



図20 レンゲル島の山の西部中腹にある，切通しと壁面に空いた壕の入口



図21 レンゲル島の山の西部中腹にある，門柱と壁面に空いた壕の入口

標高数十m程度に上ると，幅10m程で奥行きはパンフレットの地図上では100m程ある切通しに行きつく。その壁面に壕が5つ程掘ってあり，壕の中では2m程先で横に延びて互いの壕が連結している様子である。切通しの奥半分程度は藪に埋もれてしまっているので，実際には壕の入口がもっとあるのではないかと考えられる。壕の入口も内部も素掘りのままでコンクリート部分は見られない。海に面した山の斜面に壕を作るよりも，切通しを掘ったうえで



図22 レンゲル島の山の西部中腹にある、コンクリート製水槽

その壁面に壕を掘ってあるので、攻撃の被害を受けづらい位置である。

切通しの入口に戻って小道をさらに少し上ると、当時の山上の要塞地帯を区画していたと思われる門柱が一本だけ海側に残っている。高さおよそ1.5m程度のコンクリート製で、ヒンジやフックなどの金属物やその痕跡なども見あたらなかった。

小道のその先の山側の脇には天水を貯めていたかと思われるコンクリート製の円い水槽がある。概略図によればその奥には大きな兵

舎跡があるようだが、藪に埋もれていて見通せなかった。

水槽脇のコンクリート製ステップが残る石段を上っていくと、イギリス製の150mmカノン砲が残されているが、バラバラに分解した状態である。主要な部分は揃っているようではあり、地面に固定されていた台座部分もすぐ近くで見つかる。この砲座からみて山側の位置に、開口部を山側に向けて縦が1m程の3つの鉄製扉を持つ、奥行きは浅いコンクリート製の砲側弾薬庫がある。機銃掃射痕が扉やコンクリート外壁面に確認される。砲座の奥には高さ3m程の石積み擁壁ようへきに囲まれた20m四方程度の平地があり、コンクリート製の貯水槽が隅にある。「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイトでは弾薬庫跡としている場所であるが、確証は持てなかった。



図23 レンゲル島の山の西部中腹にある、解体された状態の150mm砲



図24 レンゲル島の山の西部中腹にある、150mm砲座脇の砲側弾薬庫

150mm砲が設置された平坦面からさらに山上への階段を上ると階段の右手脇に九十二式110cm探照灯（サーチライト）の本体部分の残骸が転がっている。もともとは階段の海側の岩塊の上に設置されていたのが、転がり落ちたと推測される。岩塊は既に藪に覆われているがそこへと通じる階段の残骸が視認できる。

探照灯の脇を更に上ると、山頂部に掘られたトンネルにつながっていると思われるコンクリ



図25 レンゲル島の山の西部中腹にある、九十二式110cm 探照灯



図26 レンゲル島の山頂部にある80mm 高角砲座とその砲側弾薬庫

ート製の小さな穴があり、「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイトでは水槽としている。更に山頂に近い位置には80mm 高角砲の砲座が側面の砲側弾薬庫とともに残っているが、砲そのものは残っていない。パンフレットの概略図では2か所に80mm 高角砲が設置されていたと表示してあるが、この砲座以外は藪に埋もれているようで見つからない状態である。そばの崖上にはコロニアの市街地と空港、ソケース・マウンテンの方面の展望がきく場所がある。

著者が現地で確認した上記の遺産の他には、レンゲル島の中央の山の西南麓に、地下航空燃料タンク、貯蔵用洞窟、地下重油タンクがあるとパンフレットの概略図に示されているが、藪に覆われているためか、確認できなかった。

ソケース・マウンテンとレンゲル島の戦争遺跡を概観してみると、「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイト上の情報が全般的に精細で正確であると評価できるが、一部の情報には不確かかと思われる点もあった。しかし、現地では藪に埋もれて簡単には入っていけないような場所についての情報が大量に含まれており、当時の調査がいかに大規模で精力的であったことが伺える。こちらに掲載されている遺物を全て見て回ろうとしても激しい藪に阻まれて簡単にはいかない状況であった。

2.3 その他のポンペイ州の戦争遺跡の概略

著者が現地で購入した Pohnpei Tourism 発行の「Map of Pohnpei」や、ソケース・マウンテンに設置されていた解説板の情報をまとめると、全部で8門がポンペイ島近辺に設置されたイギリス製の150mmのカノン砲のうち、本章で触れたソケース・マウンテンとレンゲル島のそれぞれ1門が確認された。解説板の情報と「POHNPEI ECO-ADVENTURE」のウェブサイトの情報を総合すれば、4門はマダラニウム (Madolenihmw) の入江を臨むドロプロプル山上 (Dolopwuropwur, ユネスコ世界遺産に登録された古代史跡ナン・マドールの近く) に、2門はウー (U, ポンペイ島を構成する5地域の1つで、コロニアの東側に位置する) の標高約1900フィートの Kupwurisio 山⁸⁾ にそれぞれ現存しているとのことである。また、ポンペイ島近辺に全部で10門の80mm 高角砲のうち6門はコロニア防衛用に、4門はマダラニウムの入江

の防衛のために（沖合の Nahpali 島のことと思われる）に配置されたこと、深さ6フィートで18インチ幅の塹壕がポンペイ島の山々に張り巡らされたとの情報が現地解説板に記載されていた。

その他の戦争遺跡として、島内のネット（Nett、ポンペイ島を構成する5地域の1つで、コロニアの南東側に隣接する）には Nan Pohn Mal 飛行場、現在は FSM の首都として政府建物群が建っているパリキール（Palikir）飛行場と、その周囲には監視所や軍道の跡などをはじめ、島の北部から南東部にかけて軍事遺産が点在しているが（図1）、今回の調査では訪問できなかった。

3. ポンペイ州における戦争遺跡見学実習を行っての成果と課題

前章で述べた戦争遺跡の現地確認のうち、ソケース・マウンテンとレンゲル島については、大学生13名を引率しての実習授業を兼ねて行った。この実習は学校法人東海大学第49回海外研修航海における寄港地研修のうち一つのプログラムとして行ったものである。ポンペイ島での滞在の3日間のうちの2月23日に全部で3種類の1日研修コースを準備し、そのうちの1つを歴史戦跡コースと設定し、ソケース・マウンテンとレンゲル島の戦跡見学と、さらに加えてレンゲル島でのシュノーケリングによる自然体験をその内容とした。この研修航海への参加学生は大学生に短大生1人を含む全98人に対し、レンゲル島へ渡る舟の定員があるために、そのうちの13人の学生を現地人ガイド1人と著者のうち2人が引率するものとして実施した。学生は全3コースのうちから希望するコースを1つ選ぶのであったが、他の2コースの研修にも定員の設定があるため、本人の第一希望のコースには参加できずに第二希望への参加となった学生もいた。歴史戦跡コースには第一希望で参加した学生が12人、第二希望であったが参加することになった学生が1人であった。全13人のうち、男性は9名、女性は4名であった。

歴史戦跡コースの研修は、午前にソケース・マウンテンでの戦争遺跡見学、その後でレンゲル島に渡り持参した弁当で昼食の後、島内の戦争遺跡見学かシュノーケリングするかを学生に選択してもらい、戦争遺跡の見学グループも終わり次第シュノーケリング組に合流して、夕方に全て終了というスケジュールで行った。午後にレンゲル島の戦争遺跡を選択したのは7人（うち女性2人）、午後の全てをシュノーケリングに充てた学生は6人（うち女性2人）であった。ツアーは現地人のガイド1名が先導して、いろんな戦争遺跡を見せて歩いてくれたのであるが、「ここに砲がある」「地下施設の入口がある」「これは日本軍が作った道だと聞いている」といったごく簡単な紹介があるだけで、現地ガイドからの遺産についての解説はほぼ無かった。解説については著者が担当して学生に話したのであるが、現地の訪問は著者にとっても初めてであったので、目にする施設や兵器がどんなものでどのような目的でどのように使用されたのか、という点を一般論の中からあるいは他の類似例を参考にしながら説明した。

まず、ツアーを通じた中で何にどんな理由で一番感動したか？ という問いに対する答えでは、午後に戦争遺跡見学選択したグループ（以下、Aグループとする。該当事者7名）ではすべ

第9号 (2019)

ての学生が年月を経ても当時のまま残っていた軍事施設や兵器という点を挙げていた。現物を目の前にする迫力やリアルさ、その希少性などについて大きく評価していた。午後にレンゲル島の戦争遺跡見学を選択しなかったグループの中で、一番感動したものに戦争遺跡を挙げていたのが全6人のうちの2名（以下、Bグループとする）、展望台からの景色やシュノーケリングで見た海を挙げていた学生が4人であった（以下、Cグループとする）。Aグループを戦争遺跡に関心が高い学生、Bグループを戦争遺跡に関心が高かったわけではないが心に響いた学生、Cグループを戦争遺跡にさほど関心が高いわけではない学生と解釈して、さらに分析を進める。

3種類の研修コースのうちから歴史戦跡コースを選んだ理由を尋ねると、表1が示すように、やはりAグループは、戦争遺跡そのものへの興味や、軍隊や兵器、歴史への興味関心が高かったが、BとCグループではそれらの関心があまり高くなかった一方で、自然体験アクティビティへの関心が相対的に高かった。

表1 歴史戦跡コースへの参加を選んだ理由として、学生が挙げた割合（複数回答可）

グループ	戦争遺跡	軍隊や兵器など	廃墟や「廃もの」	歴史	シュノーケリング	登山やハイキング	展望台からの景色	その他
A	86%	71%	14%	57%	29%	29%	14%	14%
B・C	17%	33%	17%	33%	50%	33%	33%	17%

Aグループの学生たちが、そもそも戦争遺跡に対してどのような経緯から興味関心を持つようになったかを尋ねると、戦争や平和について考える素材としての戦争遺跡に純粋に興味があったという他にも、軍事や兵器への興味、廃墟やいわゆる「廃もの」を見たいという非日常的な光景への興味、などが挙げられた。軍事や兵器への興味は、ゲームや軍事をテーマに取り上げたアニメなどが媒介している様子でもあり、現代の若者が戦争遺跡への興味関心を持つ入口と

しての一定の役割を果たしていると推測される。

表1において「その他」の理由を挙げた者はAグループとCグループにそれぞれ一人いた。Cグループの学生は、戦争と平和について現地で考えてきなさいと祖父に強く薦められたからとのことであった。Aグループの学生は、なんと自分の曾祖父が戦時中に飛行艇パイロットとしてポンペイ島周辺で従軍していたので、その場所を見たかったという理由であった。実際に見学した戦争遺跡に個人的な接点があったこの学生は、大きな感動で現地での見学時間を過ごしたようで、事後のインタビューの中でも学習効果も高かった様子がうかがえた。

次に、①ただ話に聞いたり教室で教わるのに比べて、現地で戦争遺跡を実際に見ることで、戦争や平和について興味関心が深まりましたか？ ②現地で何も解説を聞かずにただ見るより、解説を聞きながら見学したことで、より理解が深まったと思いますか？ ③今後も機会があれば、自分で戦争遺跡を実際に見たいと思いますか？ の3点について、10段階で評価してもらった結果が表2である。

もともと戦争遺跡に関心が高いAグループでは、3種の質問の全ての評点が高い。Aグルー

表2 戦争遺跡を見学しての感想 (10点満点)

グループ	①話に聞いたり教室で教わるのに比べて、現地で戦争遺跡を実際に見ることで、戦争や平和について興味関心が深まりましたか？	②現地でも何も解説を聞かずにただ見るより、解説を聞きながら見学したことで、より理解が深まったと思いますか？	③今後も機会があれば、自分で戦争遺跡を実際に見たいと思いますか？
A	9.3	9.9	9.6
B	8.0	9.0	6.5
C	8.0	7.0	6.8

ブと比較して関心が低めだった学生のうち、戦争遺跡がツアーの中で一番感動したと答えたBグループ、一番の感動だったとは答えなかったCグループと、順に全体的な評点が下がる傾向なのは順当な結果といえる。その中でBグループとCグループの違いとして、質問②で尋ねた現地での解説が効果を上げたのがBグループであったと指摘することもでき、ただ現地で現物を見るの

だけでなく、適切な解説を加えることで理解と感動も深まったのではないかと推測される。ただし、これらの分析では調査対象数が少ないので、その点には留意が必要である。

また現地では、足元がかなりぬかるんでいたり下草が茂っている小道を進んだり、整備されていない道を歩いたことへの不満もあったが、それはどれもCグループの学生からであった。現地での見学における不便や不満は、現地で見学するものの価値や希少性が理解されるとトレードオフされるものであると理解される。

4. 海外での戦争遺跡の教育・観光面での活用における課題

前章での分析で示されたように、ポンペイ州で行った戦争遺跡の見学では参加学生の満足度は非常に高く、日本との間に織りなされた歴史や、戦争と平和についての思いを深める教育効果も高かったといえる。

ポンペイ州に限ったことではないが、日本が海外に獲得していった領土や日本軍の進出した戦地に残された戦争遺跡の中には、現在の日本国内に残された戦争遺跡に無い大きな特徴が見られる。それは、軍事施設や兵器が戦後処理の過程で破却されずに、原型を留めていたり当時の様子がリアルに分かる形でそのまま残っているものが存在するという点である。日本が連合国に降伏して第二次世界大戦が終戦を迎えると、日本軍が武装解除されて解体される過程で、進駐してきた連合国軍が接収して使用した軍事施設を除けば、日本軍が再び使用して戦闘になることを防ぐために、国内ではほとんどの軍事施設や兵器は破却されたり廃棄された。日本ではほとんど目にできない光景が残されている点が、海外に残されている日本軍の戦争遺跡の大きな価値であり、見学実習に参加した学生による評価や教育効果も高まった理由となった。

一方で海外の戦争遺跡ということで、日本国内の戦争遺跡の見学よりも困難な状況である点も挙げられる。まず、書籍やインターネット上での情報掲載が一層限られている場合が多いので、情報が集めづらい。また、現地の国での文化財保護に対する法制度や取り組みと意識も異なるので、その遺産がどのような位置づけにあって、保全のためにどのような処置が講じられているのかという様子も大きく異なる。現地での説明パンフレットなどの準備や解説板などの情報提供が不十分な場合も多々ありうる。現状で文化財として認知されていない産業遺産を訪

ねて教育や観光に活用するのであれば、安全の確保が非常に重要であるという点は高野(2015)において指摘された。現地の人々も通常足を踏み入れられないような戦争遺跡であるならば、一層この点が重要になる。不発弾や埋設して放置されたままの地雷などの爆発物のリスクもありうるので、空襲や攻撃を受けているか、地上戦が行われた場所であるかどうかという情報も確認しながら現地をよく知る人のアドバイスを求め、安全に万全の配慮をしていく必要がある。そもそも、十分に保存措置が講じられ、管理され、不安なく見学できる戦争遺跡に訪問対象を限定すればそれらの問題点は無くなる。しかし、困難があってもそれが見るべき価値のある物であるならば、「探検」のような気分の中で現地を訪問することで、参加者が高揚感や達成感を覚えたり、引いては一層深い印象を心に刻むことができるとも考えられる。平和教育に携わる多くの人が口にする、高齢者ではなく若い世代に興味を持ってもらうためにはどうすれば良いのか、という問いに対する一つの答えがここにあるような気がする。

日本からポンペイ州への観光客誘致において現時点での大きなネックは、日本において発信される情報が少ないこと、そして、交通手段が不十分なので時間と費用もかかることだと、コロナの観光業経営者は指摘していた。また、現時点での島への訪問客数を考えると、島内の宿泊施設の収容能力がネックになっているわけではないとの認識でもあった⁹⁾。ポンペイ州は比較的治安も良いとされるので、種々の条件が整備されれば、学校教育の中での教育旅行としての目的地としての可能性も高まるだろう。

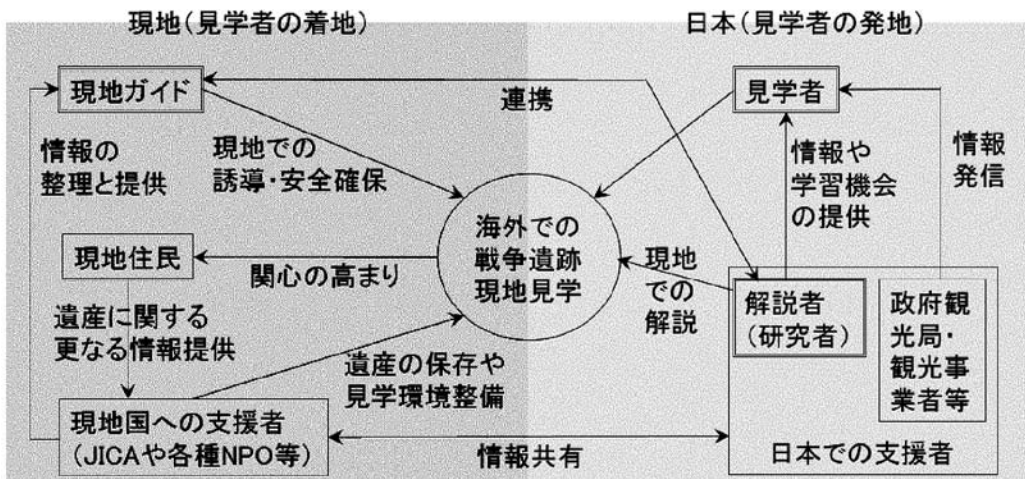


図27 海外での日本の戦争遺跡の現地見学をめぐる関係者の役割

このような海外の戦争遺跡の見学と学習をより充実させるために、図27で示したようにさまざまに異なる立場の人がそれぞれの役割を果たして関わっていくことが重要であり、高い効果を発揮するために必要なことである。

この中で特に重要なのが、現地人によるガイドと、専門的な知識を持った研究者などによる解説を組み合わせせたツアー作りを目指すことである。現地ガイドは、どんなものがどこに存在

しているか、その土地にかつてどんな出来事があったかというローカルな情報を把握している。そこに至る交通手段を確保しツアーとして成立させるとともに、安全上の注意点を押さえることができる。しかし一方で現地ガイドには、そこに残された遺物の一つ一つが当時どのように使用され、そこにあることが何を意味し、当時どんな人がどのように関わっていたのか、というような背景に関する詳しい説明や解釈を行うための情報や能力が不足している。戦争の大局の中で、その地域が、その出来事がどのような意味を持っていたのかを説明するのも難しいだろう。そこを補うのが、専門的な知識を併せ持つ研究者などの解説役の人である。現地ですら単に現物を見るだけならば、珍しいものを見て好奇心が満たされるだけで終わってしまいかねないが、適切な解説を付加することで、より高度な学習へと発展させる道が開けてくる。この点については、単に解説資料やマニュアルのような文字資料を用意して現地ガイドに提供して活用してもらえれば済むものでもないと思われる。ポンペイ州の場合では識字率の問題も挙げられるし、現地人の労働態度や業務遂行におけるモラルといった点も考慮すると、解説者の役割を現地人ガイドが兼ねるのは簡単には実現できないことと思われる。

また、このようなツアーを準備する段階では、例えばJICAやその他の機関など、現地国に対しての協力任務にある方たちなどに、現地での情報の収集と整理にあたってもらえることは非常に大きな効果がある。ポンペイ州でいうなら本論文で取り上げた案内資料である仲(2015)を自作した仲誠一のような働きは、外部から短期間だけ訪れたものには成しえないものである。未だ文化財として認知されていないものを探して人々の記憶を蘇らせ、当時を知る古老に話を聞いたりさまざまな資料を地道に探すといった作業は、現地に根を下ろして人脈を作り上げていかなければ達成できないからである。

今回のポンペイ州における調査の中で残念に感じたことは、仲誠一が現地でのJICAシニアボランティアの任から離れて時間が経つ中で、JICAの現地事務所の中で仲(2015)の成果が十分には引き継がれず、スタッフの中でも知る人がいないようだったという点であり、事務所を訪れても印刷物としての現物が入手できるわけでもなかった。仲(2015)は本来任務以外の個人の取り組みの成果として発表された成果物ということもあり、また定期的に異動が発生していく中で観光へ注力できる態勢ではなくなってしまったといったような事情もあるようである。

5. まとめ

本研究では、現時点で十分に日本で紹介されているとは言い難いミクロネシア連邦ポンペイ州における戦争遺跡を紹介・評価するとともに、その教育・観光面における今後の展開における課題を検討した。

日本で高まる軍国主義から太平洋戦争へと至った歴史の中で、近隣諸国へ多大な被害と迷惑をもたらした事実を踏まえて、日本との友好的で建設的な将来関係の構築を目指すことは重要である。その一つの入口として、海外の戦争遺跡を日本人が訪ねて学び平和について考えている姿を見てもらうことは、より理想的な未来へと向かうために必要で重要なメッセージを日本

から伝えることにつながる。関係各者のさらなる連携と協力を深めていくことで、その一層の進展を図っていくことができると考える。

謝辞

現地での調査においては、POHNPEI OCEAN CRUISE 社代表取締役の藤田和裕氏、JICA ミクロネシア支所長柴田信二氏、駐ミクロネシア連邦日本大使館にご協力いただきました。また、学校法人東海大学 第49回海外研修航海 企画委員会、同 実行委員会、同 研修団、同 事務局、東海大学海洋調査研修船望星丸とともに、その関係する皆様全てに感謝いたします。

文献

- 印東道子 編著 (2015) : 「ミクロネシアを知るための60章 第2版 エリア・スタディーズ51」. 明石書店. 313p.
- 十菱駿武 (2011) : 戦争遺跡研究の現状と課題. 史學, 80 (2・3), pp.164-183, 三田史学会.
- 十菱駿武・菊地実編 (2002) : 「しらべる戦争遺跡の事典」. 柏書房. 421p.
- 十菱駿武・菊地実編 (2003) : 「続・しらべる戦争遺跡の事典」. 柏書房. 458p.
- 高野誠二 (2015) : 廃線・廃道・旧道の探索がもたらす地域振興と地理教育における効果と問題点. 東海大学経営学部紀要, 3, pp.15-26.
- 外池智 (2008) : 戦争遺跡のアーカイブと歴史教育における活用—秋田県を事例として—. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 30, pp.13-31.
- 外池智 (2009) : 戦争遺跡の授業実践における多様な活用—土崎空襲を題材とした近隣各学校の取り組みを事例として—. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 31, pp.1-18.
- 仲誠一 (2015) : 日本人の足跡を訪ねて FSM ポンペイ州コロニアタウン 散策ツアー 2015年度版. 個人作成資料,
<https://www.micronesia.emb-japan.go.jp/Walking%20tour%20in%20Kolonina.pdf>

注

- 1) その代表的なものとして、全国の近代化遺産に関わる様々な関係者が集まって結成している全国近代化遺産活用連絡協議会では、「近代化遺産」とは、幕末から第二次世界大戦期までの間に、近代的手法によって建設され、我が国の近代化に貢献した産業、交通、土木に関する遺産のこと」と定義している。<http://www.zenkin.jp/about>
数年前までは文化庁のウェブサイトにも同様の記載があったのだが、現在では削除されている。
- 2) 十菱 (2011) では、これまでの戦争遺跡に関する研究の歩みを整理するとともにその問題点について総括しているが、海外における日本軍関連の戦争遺跡については触れられていない。
- 3) その代表例として、外池 (2008), 外池 (2009) が挙げられる。
- 4) 終戦時の日本人の人数については、ソケース・マウンテンの展望台付近に「The End Of The War」との題で掲げられた解説板の情報による。
- 5) 「POHNPEI ECO-ADVENTURE」<http://www.pohnpei-adventure.com/>
- 6) 「POHNPEI ECO-ADVENTURE」における情報に現地の解説板などの情報を加えて作成した。ベースマップは Google map を使用した。戦争遺跡の名前のうち、下線を引いてあるのは今回の調査で訪問した箇所である。
- 7) FSM 資源開発省観光局が作成のパンフレットによれば、1900年に建造された英国軍艦を日本が購入し、後にその艦載砲を地上に設置したとある。しかしこの情報については「POHNPEI

ECO-ADVENTURE」のウェブサイトには記載がない一方で、この砲は1905年製であるとしている。

8) ソケース・マウンテンにおける解説板では、山の名は Welpwotik との表記であった。

9) 一方で印東 (2015,pp.150) では、ミクロネシア連邦の観光立国に向けての障害の一つとして、「観光資源の未開発、宿泊施設の不足、観光人材の不足などの課題の克服が必要である」と指摘されている。

著者紹介

高野誠二：経営学部観光ビジネス学科准教授

栗原 剛：観光学部観光学科講師

永山茂樹：法学部法律学科教授

奥山三喜：事務部事務課

千葉雅史：国際教育センター教授